



# 現代人のライフプラン

—日本心理学会で

サニー・L・ハンセン教授の

基調講演を聞いて—

津守 真

十月八日に東京学芸大学で行われた日本心理学会でのサニー・L・ハンセン教授 (Sunny L.Hansen) の基調講演「統合的ライフプラン：二十一世紀における個人の成長と組織および社会的発達とを結び新しいコンセプト」(Integrative Life Planning: A New Concept for Aligning Personal Growth and Organizational and Social Development in the 21st Century) と題する基調講演は、学問の分野でのパラダイムの転換が



なされつつあることを示す興味深いものであったので、紹介したいと思う。ハンセン教授は、ミネソタ国際カウンセリング研究所の所長で、この分野で現在盛んに活躍しておられる心理学者である。

実をいうと、私は日本心理学会の大会に出席したのは、二十五年ぶりなのである。毎日子ども達の中で過ごす保育実践の最中には、学会に出る時間も惜しかったし、当時の科学的心理学は保育の実践とはかけはなれていた。人間の生涯の研究にあたって、私が若かったときには子ども時代と大人時代とを因果関係で結ぶ考え方が当然であった。子どもから大人への実証的縦断研究はそれに答えると考えられた。それによって明らかになることもある。しかし、その考え方は、原因と結果とを直線で結ぶものであって、人間にはどの時期にも外面と内面、論理と非論理の両面があり、主体の自由な決定が物事を大きく変えるという私共の人生の体験的事実を軽視している。二十世紀はこの考え方が人々の心にも浸透して人間と教育を宇宙規模で考える視点が欠落した。

大人も子どもも、どの程度意識するかは別として、一生涯を見渡して自分の人生プランを作って生きている。局部的な狭い視野でしか見ることができないと人生プランを間違える。プランというのは、ハンセンによれば、細部まで予定してプログラムを伴うことではない。予定に入らない不測の出来事があることを想定してはじめて人間



のプランになる。現代はとくに、人間の生涯にわたる個人の発達的变化と、社会の生活様式の時代的变化との両方に遭遇して、人は自らを変化させるといふ課題に直面している。

以下、ハンセンがあげている六つの柱に沿って述べるが、説明には私の勝手な解釈が加わっていることをお断りしたい。書けば当たり前の項目であるが、どれにも思考の枠組みの転換がある。

1 変化しつつある地球的文脈の中で、自分がする必要のある仕事を見いだす

*NIU (Finding work that needs doing in changing global contexts.)*

局部にだけとらわれていると、生涯のプランの見通しを間違える。壮年期の職業生活の成功だけの視点では教育も間違える。キャリア (career) という語は従来職業を指すことが多かったが、ここでは、赤ん坊から老年まで、各時期に人が一番エネルギーを注ぐ仕事や活動を指す。地球規模の視点で、なすに値する仕事を発見することは、成長のそれぞれの段階の課題である。地球規模というのは、宇宙的大きさをもった視点であると同時に、日常生活の中にある視点でもある。それを見出せたときには毎日を充実感をもって生きることができる。



## 2 人生を意味ある全体に織り上げる

(Weaving our lives into a meaningful whole.)

ハンセンは人生をパッチワークになぞらえて語った。パッチワークは小さな布を一つひとつ織り上げて大きな全体に織り上げる作品である。ひとつひとつの布切れには、それぞれの思い出や感情がこめられている。それをつなぎ合わせてどのようなストーリーをつくるかは、作者に委ねられている。人生の各部分も、ある時は苦く、ある時は誇らしいものである。どのようにそれらを織り成して人生全体と未来への展望を作るかはその人にゆだねられている。そこにカウンセリングの課題もある。

## 3 家庭と仕事を結合する (Connecting family and work.)

男性と女性をステレオタイプに分けて考えるのではない。男性の仕事、女性の仕事と分けるのではない。男性の仕事が女性の仕事よりも価値があると考えるのでもない。職業というときにはその中に家庭をも含んで考える。いつも両者をひとつのものと認識することが重要である。ステレオタイプな役割に社会化させる考え方は、男女いずれもの自己実現を妨げる。男性と女性はパートナーである。パートナーは、人を独立した尊厳な人格と意識することを根底とし、互いに相手を尊敬して役割を柔軟に変え得る相互的關係である。世界は否応無しにその方向に変化しつつある。その変化



に追いついてゆかれないと日常生活の葛藤が増す。

#### 4 プルーラリズムとインクルージョンに価値をおくこと

(Valuing pluralism and inclusivity.)

世界は異質な複数（プルーラル）の人々から成っている。異質な人や文化を排除するのではなく、両者を包含する（インクルージョン）社会をつくることに価値をおくこと。世界はその方向に進んでいる。このことはいまや教育と福祉の最大の目標である。それはヨーロッパのみでなく地球規模で要請されている。世界のどこでもこれが十分に達成されているわけではないが、教育と福祉がこのことに価値をおかなかつたら、世界はどうなるだろう。この点でとくに日本の教育には問題が多い。異質と考えられてきたものが、人間の観点から言えば、実は異質ではない。外国人の子どもも障碍をもつ子どももだれでも、人間である点で少しも違わない。

#### 5 個人の人生の移行と社会組織の変化とを自分できりもりすること

(Managing personal transitions and organizational change.)

生涯にわたって個人の人生は幾度も移行し変化する。入園、入学、就職、結婚、転職、退職、新しい仕事、家族の変化（結婚、病气、死）、職場の改組、倒産、リスト



ラ、等。時代の変化の中で個人の生涯もまた変化する。人はその両者の変化の危機に耐えるだけの精神的強さ（自我の強さ）を備えておかねばならない。育児も教育もカウンセリングもそこに関係する。

人は先がどうなるか分からないままに決断をくだす。それによって未来が展開し、変化が引き起こされる。その変化に柔軟に対処し得るような自分自身をつくっておくことが求められる。

## 6 精神性と人生の目的の探求 (Exploring spirituality and life purpose.)

実証科学では、久しい間、精神性、魂 (spirituality) という語は禁句であった。いまやこの語が心理学会の基調講演で語られる、時代の変化に私は驚いた。

ハンセン教授につづくもうひとつの基調講演は、お茶の水女子大学ジェンダー研究センター長の原ひろ子教授による「ネットワーキングとエンパワーメント―複数の文化を生きる人々をめぐる―」で、実質的にハンセン教授の講演につながるものであった。私が最近考えていたことにつなげて興味深かったのは、ネットワークと集団の相違である。集団には境界がありその中の個人は集団に規制されるが、ネットワークでは、個人がどのように他者と結合するか、多様な選択がある。私は日本の教育、福祉



では殊に、自分の属する集団外の異質な他者と文化に対する寛容さがいまなお大きな問題であることをあらためて考えた。そして、異質な、不確かな未来を肯定的に考えて、希望をもってインクルージョンの世界に向かって歩きだす思考の新たな枠組みが、二十世紀末、ここに準備されていることを知った。

Hansen, L. S. Integrative life planning : Critical tasks for career development and changing life patterns. San Francisco : Jossey-Bass 1997